

大齋節第 2 主日

聖書日課と主教のメッセージ



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

大齋節第 2主日特祷

全能の神よ、わたしたちは自らを助ける力のないことをあなたは知っておられます。どうか外は体を損なうすべての災いを防ぎ、内は魂を襲う悪念を除いてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

旧約聖書 創世記 12:1-8

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの檜の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。

使徒書 ローマの信徒への手紙 4:1-5,《6-12》,13-17

では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょう

か。もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。

神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。

福音書 ヨハネによる福音書 3:1-17

さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないか

らです。」イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」するとニコデモは、「どうして、そんなことがありますようか」と言った。イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

大齋節第二主日の黙想

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸

大齋節や聖週には黙想をする機会が多くありますが、黙想とは唯口を閉じ、黙っていることではありません。寧ろ、普段以上に喋ることもありますが、それは、世間話や噂話に花を咲かせるお喋りではなく、徹底的に神様と話し込むことです。

世の中、言った本人でさえも気付かなかつたり、覚えていなかつたりする些細な言葉が、誰かの力となつたり、愛の籠もった言葉になつたりすることがあります。

正反対のことも起こり得ますが、言葉には何かしら力が秘められていることはどちらの場合にも当てはまります。

あるカトリックの幼稚園で教えている有名な歌です。「善いお話をするために、神様は私たちに小さなお口を下さった！」単に可愛らしいだけでなく、信仰的にも靈的にも深みのある歌詞であると同時に、私たちを振り返らせる厳しい歌詞でもあると思えます。

口の不自由な方もおられる一方で、何不自由無く言葉を使える中、果して与えられている口、教えられた言葉を、与えられたことに相応しく使っているかとなると自信をもって「然り」とは言い難いところが私自身あります。悪口、陰口、噂話、知ったかぶり、大言壮語に言葉が使われもします。

今一度聖書に立ち返りますと、一人の人間の言葉にさえ計り知れない力

が秘められているなら、生きた神様の御言に於いては況しておやです。また、癒しの力ということで、福音書の中にこういう事件が記録されています。あるローマの兵隊が、部下が病に苦しんでいたため自らイエス様の元へ足を運び、部下を癒して戴きたいと願い出ます。その上官の姿に心打たれたイエス様は言われます。「わたしが行って、治してあげよう」と。イエス様は、唯々苦しみ、病んでいる人への癒しのために「私が行く！」との一言を言って下さいます。

しかも、この事件は二千年前にこういう事があったではなく、今も苦しむ者たちに向かって「私が行こう！」「私が行って癒してあげよう！」と語り続けていらっしゃるイエス様の心そのものです。

イエス様の癒しとは、病んでいる人すら気付かないようなところ、望み得ないような所に迄及ぶ働きですが、そこには一つだけ条件らしきものがあります。

それは、キリストによる癒しの力の前に自らを差し出すことです。だから、イエス様は言われます。「あなたが信じる通りになるように」「今から私がなそうとする癒しの働きに向かって、あなたの方からも心を添えなさい！」と。

それは、私たちの内に住まわれ、私たちと一つになろうとされるイエス様の心と表裏をなしてもいます。この一つになろうということで、今日の福音書にある「神は、その独り子をお与えになったほどに、この世を、即ちこの世に生きている私たちを愛してくださった」、即ち愛の神様の姿を伝えていきます。この恵みを与えられている私たちから、その御言に向かって何が出来るでしょうか？